

最終章
鏡花水月
【鏡花／明治エンド】

門をくぐると、朱色の本堂の真上に赤い満月が昇っていた。まるで月の光そのものが、本堂を朱に染めているようにも見える。本堂の両脇に鎮座するのは、狛犬ではなく狛虎だ。なんでも毘沙門様は寅の年、寅の日、寅の刻にこの世に降臨されたとかで、この狛虎はそれにちなんでいるらしい。

——私は誰かを探していた。大切な約束を果たすために。

「やあ、芽衣ちゃん」

「っ！」

背後から私の肩を叩いたのは、チャーリーさんだった。

「はは、驚かせてしまったようで悪かったね」

「ほ、ほんとにびっくりした」

でも、まさかここで会えると思わなかった。いくらチャーリーさんの格好は悪目立ちするといっても、こんな人混みのなかではさすがに見つけづらいと思ったから。

「で、誰を探していたのかな？」

「え？」

「僕は君と、満月の夜に日比谷公園で待ち合わせしていたはずだ」

「でもおかしなことに君は今、僕との約束とは違う場所にいるようだからね」

(あ……)

「もしかしたら君は、誰か別の人と約束でもしていたのかな？　と思ったんだよ」

(違う、そうじゃないの。チャーリーさん)

私はただ、人の流れに飲み込まれてしまったただけだ。でもなにを言っても言いわけのようになってしまう気がして、私は押し黙った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？」

なおも彼は、その話題で食い下がってくる。

「さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？　君にとってその人は、現代での生活よりも大切なものなのかな？」

「それは……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。

現代に帰らなきゃ……と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……へえ？　あんなに帰りたいたって言ったのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

(でも、どうして……帰らなきゃいけないと思うんだろ？)

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

（じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの？）

私がいなくなったら、あの人はどう思うんだろう。

私がないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

（――そんなことさせたくない）

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私ほうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きっとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたどえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のことを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

*

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

(チャーリーさん)

私は何度も呼びかけた。

(教えて。あなたは誰なの?)

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」

ぱちんと、大きく指を鳴らした。

*

「ねえ、ちよつと！」

——次の瞬間。私の視界をひとりじめしていたのは、鏡花さんだった。

「聞いているのかよ？」

「え……？」

ざわざわとした喧噪に包まれる中、私は周囲を見回した。お祭りに活気づく人混みのなか。その中心に、着物姿の鏡花さんが仏頂面で立っていた。

「なに、まだ食べ足りないとか言うんじゃないよね？ 二八そばに天麩羅、寿司や飴細工までたいらげておいてさ」

「私……」

（さっきまで、チャーリーさんと一緒だったはずなのに）

なのに彼はどこにもいない。まるで2本立ての夢を見ているような、不思議な気分に見られた。私は、はっとして空を見上げる。

（あれ……？）

月が、ほんのわずかだけ欠けている。

満月をちょうど1日過ぎたくらいの、朱色がかった月。

（どうして……？）

なんて大がかりなマジックだろう。それとも単に、夢を見ているだけなのか。

……私はいつのまにか、現代に帰るタイミングを完全に失ってしまった。

「なに物足りなさそうな顔してるんだよ？ 縁日が楽しくなかったの？」

「い、いえ」

いつか、あの茶屋で交わした『一緒に縁日に行こう』という約束。この約束が果たされたということは、私はやっぱり、現代に帰ることはできなかつたんだろう。

（ほっとしてるの？ 私……）

もう2度と家族や友達に会えないかもしれないのに。それよりも、目の前に鏡花さんがいることに安堵しているなんて――

「……？」

その時ふと、鏡花さんの肩を見て違和感を覚えた。

（……まだ戻っていないのかな）

いつも、鏡花さんの肩にちょこんと乗っているはずの白ウサギ。

夜なのに姿を見せないということは、今も行方がわからないままのようだ。

「よう、お2人さん！」

すると前方から、スーツ姿の音二郎さんが軽く手を挙げながら歩いてきた。

「……げっ」

「一緒に縁日か？ 仲良いなあーおまえら」

「う、うるさいなあ。あんたに関係ないだろ。ほつといてくれよ」

「関係ねえわけねえだろうが。……あいな、こいつはもともと俺が拾ったんだつうの」

そう言いながら、音二郎さんは私の肩をぐいと抱き寄せる。

「っつ！ ばかっ、なにを……！」

「それをおまえ、横からぺろっとかっさりいやがってっ。トンビかおまえは！」

「……って、酒くさっ！ なんだこの酔っ払い、絡んでくるなよ」

「俺が手塩にかけて育てて、ゆくゆくは神楽坂一の人気芸者にしてやろうってもくろみがあったのによっ」

「あの、音二郎さ……」

「なにが悲しくておまえみてえな書生風情にくれてやらなきやなんねえんだ、ああ？」

「し、知らないよそんなことっ！ そんなの川上が勝手に夢抱いてただけじゃないかっ」

「うるせえっ。おまえやお、流行作家にならねえとしようちしねえからなっ。貧乏作家にこいつを預けられるかってんだ。はあーったく、おまえなんかやるにはもったいねえよなあ！」

「あなたの娘でもなんでもないだろうーっ？ いいからその手を離せっ。なれなれしい！」
音二郎さんの手を払い、鏡花さんは私の腕を引っぱった。

「おいこらっ、なにすんだっ」

「酒臭い息をこの子に近づけるなよっ。あっち行けったらっ！」

「……お？ そうかそうか、久しぶりにアレをやられてえのか」

「はあ？」

「それではご要望にお応えしてっ、必殺ジヨリジヨリ……っ」

「うわあっ、くるなああああっ……！」

「……………」

お酒が入ったせいとか、なぜか花嫁の父モードに入ってしまった音二郎さんと、その魔の手から逃げ惑う鏡花さん。

(しばらく放っておこう……)

*

「……はあ、なんなんだよあいつ」

音二郎さんはさんざん絡んできたあと、野暮用があると言い残し俵に乗ってどこかに行ってしまった。

「鏡花さんのこと心配してるんですよ、きつと」

「はあ？ 僕のことじゃなくてあなたのこと心配してるんだろ？……あなた、ずいぶんと過保護にかわいがられてみたいだしさ」

「そうですね」

「っ!？」

「音二郎さん、面倒見がいいですから」

素直に肯定すると、鏡花さんは信じられないといった顔で小さく肩を震わせた。

「……きよ、鏡花さん？」

「あのさあ、あなたは今日、僕につき合うって約束してるんだよ？ なのになんであいつのことを良く言ったりするのさっ。あなたまさか川上側の人間なのかよ？」

「川上側の人間、って」

（ちっちゃい争いだなあ……）

「だいたいあなたは、あいつと一緒にいすぎなんだよっ」

「そりゃあ、たしかに最初にあんたを拾ったのはあいつかもしれないけどさ。だから

ってあんたをひとりじめする理由にはならないっていうか……」

鏡花さんは自分の声の大きさに気づいたのか、周囲をきよろきよると見回してから、私の腕をぐっと掴んだ。

「……も、もういい、ちよつと来てっ！」

「わっ！」

鏡花さんはそのまま私を、とおりかかった俥に強引に押し込んだ。

*

……鏡花さんに連れられてやって来たのは、不忍池だった。遠く離れたガス灯のあかりがわずかに照らすだけで、足下はほとんど見えないほど暗い。

「ふう……やっとな静かになったよ」

水と土の匂いが立ちこめるなか、鏡花さんは深く息を吸い込んだ。

「にぎやかなのは結構だけど、夜が明るすぎるのは考えものだね。まぶしく照らすと逆に見えづらくなる」

そうひとりごちて、せいせいしたように息を吐く。風の音と、岸に水が打ちつける音、

鳥や虫が生息する気配。竜神が棲んでいた不忍池は、静かに凪いでいる。

——鏡花さんの中に入り込んだ竜神は、あれから鏡花さんの手を通じて戯曲『夜叉ヶ池』の作品内に戻っていった。

ちなみに完成した『夜叉ヶ池』の原本は、音二郎さんが自分の劇団で上演するために、虎視眈々と狙っているという。

「……あんた、怒ってるんじゃないの？」

「どうしてですか？」

「だって……急にこんなところに連れて来られてさ。……退屈だとか思ってるんじゃないの？ ここには縁日の夜店もなければ、牛鍋屋もないし」

（……私をなんだと思ってるんだろうなあ）

ここに牛鍋屋がなくなっちゃって、私はこれまで何度も上野まで鏡花さんに会いに来た。鏡花さんが上野でなにをしているのか、気になってしかたなかったから。……まさか逢い引き相手が竜神とは思わなかったけど。

「私……たまに怖くなるんです。鏡花さん、目を離すとすぐに知らない世界に行ってしまうそうだから……なんか気が気じゃなくて」

鏡花さんは、曖昧な境界線上を危なげもなく歩く人だ。幼い頃から物の怪とともに暮ら

し、言葉という手段で幽玄の世界を描く。それらは時に魂を宿して、現実の世界で生き生きと動き出す。

日常と非日常の境なんてないからこそ、鏡花さん自身がいついなくなっても不思議ではない気がした。

——あの白ウサギのように。

今だって、闇夜に溶けてしまいそうなほどその輪郭ははかない。

「……なに言ってるんだよ。それを言うならあんたじゃないか」

心外だとばかりに鏡花さんは言った。

「僕からしてみれば、曖昧なのはあんた自身だよ……白昼と暗夜をつなぐ黄昏みたいに、現れたと思ったらあっというまに消えてしまうんだ……あんたがもとの時代に帰るとか言い出した時、僕がどんな思いをしたか……あんた知らないだろう？」

「鏡花さん……」

私の指に、鏡花さんの指が絡む。

「今だって、怪しいものだよ。この時代で生きていく振りして、飽きたら気まぐれに帰ったりするんだろ？」

(そんなこと、しない)

私はもう2度と帰らないし、帰れない。そんな私を鏡花さんが受け止めてくれるなら、救われる。

現代で過ごした記憶を、いつかちゃんと思い出しても、思い出せなくても。お互いが同じ不安を抱えているなら、お互いが目を離さずにいればいい。……そう、思えるから。

「……ねえ。川上じゃないけど、今から僕の夢を言うから聞きなよ。世迷い言だと思ってもいいからさ」

鏡花さんは私の手を取り、自らの頬に押しあてた。

「夢……?」

「そう。まずは、神楽坂に家を借りるんだ。2人で住んでも十分な広さで……そうしたら僕は、あんたをすぐにでも置屋から呼び寄せるよ。……その家は、僕とあんたのための家だから」

私の手に、唇の熱を感じた。人差し指に、手の甲に、小指に……ゆっくりと。

「……きつと紅葉先生は、置屋の子を許嫁だと紹介したらかんかんに怒るだろうな。それでも僕は……あんたを諦めたりしないけどね」

軽く手を引っ張られ、その胸のなかに身体が倒れる。優しく抱きしめられ、少しずつ力が強くなる。

「……目、閉じて」

「……」

言われるまま、目を閉じた。少し顎を上げると、あたたかい吐息が唇にあたる。

「……………、っ……………」

やわらかく押しあてられた唇は、夜風のせいも、少しだけ冷えていた。でも、重ねられるうちにあたたかくなって、すぐに互いの境がわからなくなるほど、なじんでいく。

「……………」

ほのかな香の匂いに、私の思考は甘く乱れていく。

「……ねえ。そういうえば僕は、あんたの気持ち、まだ聞いてないんだけど」

「え……………」

「僕はちゃんと伝えたつもりだけど、あんたからは聞いてない。……まあ、あんたみたいに鈍いのが僕の気持ちをわかってるとは思えないけど」

「……わ、わかってます。ちゃんと」

「じゃあ、あんたも言ってみなよ。僕のことどう思ってるか。ちゃんと言えたら、少しはあんたのこと信用できるかもしれないからね」

意地悪い声が私の鼓膜を震わせる。恥ずかしくて耳まで真っ赤になっていることをこの

闇はどこまで隠してくれてるんだろう。

「言いなよ、早く」

私の頬を挟む手。鏡花さんの吐息が私の耳を煽る。

「あんたの声で聞きたいんだよ。僕ばかりに言わせて、ほんと理不尽だからさ」

夜風にさらわれる私の髪を指で押さえながら、彼はねだった。苦しいほどに高鳴る胸。眩暈を覚えそうな、私を抱きしめる腕の力。

「……………好き……………です」

どうにも恥ずかしくてうつむいてしまう私の顎を、鏡花さんの指が持ち上げた。

「……………。……………もう1回」

「え？」

「ちゃ、ちゃんと聞こえなかったんだけど」

「でも、言いましたよ？」

「聞こえなかったって言うてるだろ？ もう1回、聞こえるように言いなよ」

「そんなっ……………」

「なに、嫌なの？ 言いたくないってことは、やっぱりあんたは僕のこと好きじゃないってことだよな」

じろりと責めるような目で睨んでいるくせに、私を抱きしめる腕はこのうえなく優しい。「そんなことないです。私だって鏡花さんのこと……好き、です。ずっとこの時代にいたいって、思えるくらい」

「……ふうん？ まあ、上出来だよ。あんたにしては」

そうつぶやくと、鏡花さんは照れたようにそっぽを向いてしまう。

「……………」

その顔をこっそり覗き込むと、

「な、なんだよ」

「いえ、なんでも」

「なんでもないってことないだろう。ニヤニヤしちゃってさあ」

「ふふ」

(……あれ?)

その時、視界になにか白いものがチラついたような気がした。周囲を注意深く観察すると、草むらから伸びる真っ白な2本の耳を発見する。

「あっ！」

その耳は見まがうことなく、あの白ウサギのものだった。まさかこんなところで道草

を食っているとは思わず、ついはいやいだ声が出てしまう。

「なんだよ急に。近所迷惑だろ？」

「見てください、鏡花さんっ。ほら、あの子が帰ってきましたよ！」

「え？」

私は意気揚々と白ウサギを指さした。背の高い雑草をぴよこんと飛び越え、白ウサギはこちらへと駆け寄って来る。そして私たちの足元を一周したかと思うと、大きくジャンプして私の肩に乗ってきた。

「よかった……」

私はそのままあるい頭を撫でながら、安堵の息をつく。ずっとずっと、心配していた。もしかしたらあの騒ぎのせいで消えてしまったんじゃないかと。物の怪に命という概念があるのかどうかはわからないけど、だからこそ、いつ消えても不思議ではない怖さがある。

「よかったですね、鏡花さん」

「……？」

(ん?)

思いのほか反応が薄いので、私は首をかしげた。声が出ないほど感動している、という

ふうでもない。

「鏡花さん？」

「ウサギ……あなたの肩に乗ってるの？」

「え？ いるじゃないですか、ほらここに」

「そうか……冗談言ってるわけじゃなさそうだよ。その顔だと」

鏡花さんは私の肩を見つめ、どこか諦めを含んだ声音で、そうつぶやいた。

「鏡花さん……」

私は信じられない思いで、鏡花さんへと一歩踏み出した。

「まさか、視えないんですか……？」

「うん、視えないよ」

私の問いに、彼はあっさりと頷いた。

「最初はあるが幻覚でも見てるんじゃないかって思ったけど、どうやらおかしいのは僕のほうみたいだ」

「そんな……」

鏡花さんの目に、白ウサギが映らない。それはつまり、鏡花さんが魂依ではなくなってしまう、ということ……？

(そんなことがありうるの?)

ある日突然、魂依ではなくなってしまうということが。

「ひ……ひどい……」

「なにがひどいのさ？」

「だってそんなの、すごく理不尽じゃないですか。今まで視えてたのに急に視えなくなるなんて……だってあの白ウサギは……」

鏡花さんのお母さんの形見だった。子どもの頃からずっと一緒だったはずなのに。

「理不尽なものにも、そういうものなんじゃないの？ もし魂依に能力なんてものがあるとしたら……僕はそれを、あの白雪の一件で使い果たしてしまったのかもしれないしさ」

鏡花さんの口調に悲壮感はない。淡々としたものだった。

「それに魂依の数自体、年々減ってきてるっていうしね。僕が視えなくなったって、なんの不思議もない話なんだよ」

「でも……」

そう言われてしまうと、なにも言葉が出ない。肩に感じる、白ウサギの重み。私は奥歯を噛みしめながら、白ウサギの頭をゆっくりと撫で続ける。

「じゃあ……私の力を、鏡花さんにあげられたらいいのに。私には必要のないものだから……」

せめて私の中から力を取りだして、差し出すことができたらいいのに。そうでなきゃ、悲しすぎる。鏡花さんも、この白ウサギも。

「……必要ないなんて言うなよ。少なくとも僕は、あんたが魂依でよかったって思ってる」

「……？」

「その白ウサギさ、僕には見えなくても……あんたに視えてればそれでいいよ」
そう言って、鏡花さんは微笑んだ。やわらかでおだやかな表情だ。

「あんたに視えて、あんたが『いる』って言うてくれれば、それでいい」

「鏡花さん……」

胸がぎゅつとしめつけられる。鼻の奥がつんと痛くなって、まぶたが熱くなったけど、どうにかこらえた。

(……そうだ。私には必要のないものなんかじゃないんだ)

この力が必要だと言ってくれる人がいるなら、決して無駄なものなんかじゃない。私は肩に乗った白ウサギを抱き上げた。

「鏡花さん。触ってあげてください」

「え……」

「この子も喜ぶと思いますから」

そう言うと、鏡花さんは少しためらってから、ゆっくりと手を伸ばしてきた。ちょうど白ウサギの頭の位置で手を止め、わずかに目を見開く。

「……あつたかい」

「えっ？」

「視えはしないけど、いるのはわかるんだ。間違いなく体温を感じるから」

「そうなんですか？」

「うん。そうみたいだ」

(……じゃあ、完全に魂依の力がなくなったわけではないの?)

力がなくなったわけではなく、ただ単に力が弱くなっただけなのかもしれない。それとも――

「そっか、ここにいるんだ……」

もしこの先、鏡花さんから残りの力がなくなったとしても。鏡花さんの隣には私がいる。私がいつだって『白ウサギはここにいますよ』と言ってあげられる。

(それでいいんだよね……)

「……ふっ」

私たちは同時に見つめ合い、小さく笑い合う。――池に映るのは、少し欠けたいびつな月。白ウサギは耳を揺らし、鏡花さんの肩に、ぴよこんと飛び乗った。

*

「……ふうん。なかなかうまく化けたもんだよね。まだあんたが半玉だった頃は、化粧もろくにできなかつたくせにさ。今ではいっぱしの芸者って顔してるじゃないか」

鏡花さんはおちよこを口にはこびながらしげしげと芸者姿の私を眺めている。私が半玉から芸者になったのは、今から少し前。それなのに鏡花さんは、座敷に来るたびにどこか不思議そうに、それでいてまぶしそうに私のことを見つめる。

「ちゃんと芸者らしく見えているとしたら、それは音二郎さんの指導のおかげですよ」

「……まあ、そうかもね。あいつは昔から面倒見だけはよかったし」

「そうですよ。私みたいな素性もわからない子の面倒を甲斐甲斐しく見てくれましたもの」

音二郎さんに拾われた日のことを思い出し、私の口元に自然と笑みが浮かんだ。

「そういえば音二郎さん、今は劇団の公演で全国を回っているんですね」

「さあ、知らないよ川上のことなんて」

そっけなく言ってから、おちよこの中身を一気にあおる。

「ま、あいつのことだから、そのへんで行き倒れてたってゼーんぜん不思議じゃな……」
がらり、と座敷の襖が開いたのはその時だった。

「あーら、鏡花ちゃんとその嫁じゃないか！」

「っ！」

「!!！」

ありえない声を耳にして、私と鏡花さんの身体が同時にびくっと揺れる。襖を開けた向こうに立っていたのは、今まさに噂をしていた人物——音二郎さんだったからだ。

「音二郎さん！」

「か、川上！　なんでいるんだよ！」

「あ？　今福岡から帰ってきたんだよ。そんでちよっくら1杯ひっかけようかと思った
ら、どっかの夫婦がいちゃついているところに遭遇しちまったってわけだ」

音二郎さんはニヤニヤ笑いながら鏡花さんの隣にどかっとかぐらをかいた。

「い、いちゃついてなんかないよっ。ただ普通に話してただけじゃないか」

「そ、そうですよ、音二郎さん！ 鏡花さんはお客さんで、私は接客中なんです」

音二郎さんにからかわれていることはわかってる。だけど、私も鏡花さんも顔が赤くなるのを止められない。

「いちゃついてない……ねえ。料亭に行くたびに嫁を指名するやつが、なにえらそうに言ってるんだか」

「っ」

「おまえ、なんだかんだいって嫁のことが心配でしようがねえんだろうな」

「いきなり現れて、なんなんだよホントにつ。悪いけど今夜は貸し切りだよ。帰れ帰れ！」

「なんだなんだ、冷たてえやつだな。そんなやつにはみやげはナシだ。はーあ。せっかく太宰府で梅ヶ枝餅を買ってきてやったって言うのによ」

「梅ヶ枝餅……っ？」

甘党の鏡花さんはたちまち顔を輝かせた。その反応に満足したのか、音二郎さんはあっさりとその包みを鏡花さんに手渡した。

「ほらよ」

「うわあ、川上のくせに気が利くじゃないか。じゃあ、さっそく……」

鏡花さんは嬉しそうに、かたわらに置いた荷物をあさりだした。

(あっ！)

その行動がなにを示しているか、私と音二郎さんにわからないはずがない。

「わーっ、いい、出すな！」

「ん？」

「アルコールランプは今出すな！ 今じゃなくてあとで食べよ、なっ？」

「な、なにするんだよっ、今食べたいのに！」

「いいから家で食べ！ ここじゃまずいだろーがっ！」

アルコールランプをセットしようとする鏡花さんを、2人がかりでどうにか止めることに成功した。こんなところであんばんを燃やされたら、間違いなく鏡花さんは出入り禁止になってしまう。

「はあ………つたく、こんな高級料亭でボヤ騒ぎなんざシャレにならねえぞ」

「ふん、わかったよ。……よし。もう帰るっ」

「へ？」

「へっ？」

「今夜はもう家に帰る。ほら、あんたも行くよ」

そう言って強引に私を立ち上がらせ、そのまま襖へと走り出した。

「え？ あの、ちよつと……!？」

「あつ、おまえら！ おい！ 待ってって！ どこ行くんだこらあつ！」

*

「あー、夜風が気持ちいいなあ。はは、逃げてきて正解だったよ。まあどうせみんな酔っ払ってたし、誰がいなくなるうが気づかれなかったと思うけどね」

鏡花さんは、私を振り返ると屈託のない顔で笑った。

「って、私は仕事申中だったんですけど？」

「ああ、そういえばそうだったけ」

つい鏡花さんと一緒に料亭を出てきてしまったけど、こんなことが女将に知られたら絶対に怒られる。そんな私の杞憂を察したのか、鏡花さんはふふんと笑った。

「いいよ。僕があとで店のほうに言っておくから。今夜一晩、あんたを指名させろってさ」

私の顔を覗き込みながら、悪びれることなくそんなことを言う。そして、少しだけ拗ね

たような顔で続けた。

「だって、しょうがないだろ。……あんたが一人前の芸者になったのは喜ばしいことだけどさ。僕が知らない間に、あんたがどういう客と過ごしてるのかって考えると……」

「……………」

「なんだか無性に、落ち着かない気分になるんだよ」

そう言って、鏡花さんはゆっくりとした足取りで再び私の前を歩き始める。

(まああたしかに、しばらく仕事を続けたいって言ったのは私だもんね……)

本当なら、結婚した時点でこの仕事は辞めるはずだった私。でも人手が足りないこともあり、あと少しだけ……と女将から言われ、ずるずると今日まで続けてしまったのだった。私自身、この仕事が嫌いなわけではないから、座敷に出るのもやぶさかではなかった。

「……でも私、ほかのお客さんとはとくになにもありませんよ？」

「なにあんた。僕が心配症だって言いたいのか？」

「いえ、そういうわけでは」

「……そう思われるのは心外だな。これぐらい、夫だったら普通の感情だろ？ 別に僕だけが特別ってわけじゃないからね、言っとくけど」

(……そうだよ。私、鏡花さんにはずいぶんわがまま言っちゃったもんなあ……) 心配をかけているのは、ほかでもないこの私。私は少し離れた場所から、その顔を見上げた。

「あの……、隣を歩いてもいいですか？」

私の問いかけに、鏡花さんは軽く顔をしかめてみせる。

「……なんでそんなこと、いちいち聞くんだよ。いちいち聞かなくなつて……僕の返事なんかわかつてるだろ」

もちろん、そう言ってくれるのはわかっていた。私は小走りで鏡花さんに近づき、隣に並ぶ。

「……そうだよ。なにも聞かずに、そうやって勝手に並べば？」

「でも以前は、女と一緒に歩くなんてとんでもないって感じじゃなかったでしたっけ」初めて会った頃は、少しでも近づこうものなら猛烈な勢いで追い払われた。

いつから私たちは、こんな近くにいることがあたりまえのようになったんだろう？

「ふん、気が変わったんだよ。あんたみたいなの、まあそこそこ見栄えのする芸者を連れ歩くのも悪くないかなってね」

「え……」

「こうやって……あなたが僕の腕に腕をからめたりしてさ」

そう言いながら、鏡花さんは私の右腕をとって自分の左腕にからませる。

お酒が入っているせいだからか、鏡花さんらしからぬ大胆な行動だ。

「きよ、鏡花さん、人目が……」

「だから、なに？　あなたが僕のものだってこと、こうやって世間に知らせておかなくちゃ。……悪い虫がつかないように」

さつきまで苛立ちを含んでいた声音に、優しいものが混じる。私を見つめる瞳がぐっと近づき——やがて2人の距離が完全になくなった。

(わ……)

路上の暗がり、ふいに受けた口づけ。やわらかく湿った唇が、ついにばむようなキスをくり返す。

「んっ……、鏡花さ……」

「……なに。まだ人目が気になるんだ？」

鏡花さんは、たまにこうやって夕チの悪いいたずらを仕掛けてくる。それを拒めない私は、ますます鏡花さんのいたずら心を増長させてしまうんだろう。

「……そういうあなたの困った顔が見たかったんだ。ふふ、いい気味だよ」

「……っ、ふ」

「まったく、面倒な子を嫁にしちゃったもんだよなあ……まああんたが面倒なおかげで、結構飽きないから……、これでよしとしてあげるけどね」

鏡花さんは唇を離し、してやったりな顔でかすかに微笑んだ。それから私の手を引き、再び歩き出す。

「ほら、早く帰るよ。僕らの家についたら、もう人目なんて気にする必要はない。そう
だろ？」

「……はい」

「そうしたらあんたは、今よりもっともっと僕にくっついてくるはずだよ。もちろん、
そうしてくれないと困るよ。僕はとっくに、そのつもりでいるんだからね……」

夜のしじまに響く、2人分の足音。私たちは坂の上にある我が家を目指して、軽やかに
その音を奏で続けた。

（ F I N ）